
姉妹

林檎

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姉妹

【Nコード】

N0860B

【作者名】

林檎

【あらすじ】

姉妹の愛をテーマにしました。あまり知られていないのかもしれませんが、この話にでてくる病気に苦しんでいる人は実際に沢山います。そんな人のことを少しでも理解して欲しいという気持ちを込めて書きました。長いので、投稿後、自分なりに気になる箇所が沢山あり何度か手直ししました。

（前書き）

途中、何箇所か（読む人によっては）気分を害するような表現があるかもしれません。嫌だと思ったら読むのをやめて下さい。

また、もし最後まで読んで頂けた場合には後書きを必ずご覧になってください。

* マサコ *

当たってしまった。

「あたし、宝くじで一万当たったんだー。いいでしょ」
友人はそう言って、誇らしげに万札を揺らした。

「何に使うの？」

私の目は福沢諭吉から離れない。

「ん？スキニーパンツ買う。まだ持ってないんだもん。あり得ないよね」

そんなの、私だって持ってない。

その翌日、私が当たったのは宝くじではなくクリームパスタだった。

* ミツコ *

煩わしい。廊下を数十分おきに行き来する足音。トイレの水を流す音。その都度、念入りに手を洗う音。気になって眠れやしない。

「…まあちゃん、大丈夫？」

ドアを開けると、姉は身を折り曲げるようにしてベッドにいた。

「クリームパスタ」

疲れた顔でつぶやく。いつもより一層顔が青い。

久々に姉の部屋を覗いたあたしは、そのまま中に入る。全てがきつちりと整頓され、コンセントは必ず抜いてある。電気代節約のため

なのか。漏電を防ぐためなのか。こんな時でも家中のコンセントを抜く日課を忘れていないようだ。

「お母さんのご飯食べたらしいのに」

「ちゃんと食べたよ」

この人は昔から胃下垂気味なのだ。母からもらったハンドバッグを、足のうらで触ることが出来ない人でもある。

「ん？」

あたしはある物に気付いて、それを手にとった。

「何これ？」

「…見ての通り」

身動きの取れない姉は、顔を上げようとしなない。

「ロトシックス？」言いながら、うずくまる姉に布団をかけてやる。

「まあちゃんでも、一攫千金に興味あるんだ」

愛すべきあたしの反面教師はその夜、多分一睡もしなかった。

あたしが早く大人になりたいのは、姉を見て生きてきたからだと思う。姉はいつまでも弱く、もろく、傷付きやすい。妹のあたしが誰よりそれを知っている。

外の世界に順応するには、大人であることが必要十分条件なのだとあたしは思う。常に向上心を持ち、プライドを片手に脇目も振らずに歩いて行くのだ。強くあり、踏まれても踏まれても歩き続ける。其れが大人だ。

* マサコ *

クリームパスタに当たっただなんてとても言えない私を笑うかのように、友人の美脚が張り付くようなジーンズに眩しい。

「今日、代返よろしく」

当然のように彼女は言う。

「うん」

全くもっていいのだ。私は講義を聞くのが好きだし、休む気なんてさらさら無いもの。友人が去って、私は固形石鹸を片手にトイレへ向かう。

* ミツコ *

高校生に見られない顔で良かった。

「早く、作ってよ」

胸が烧けるような顔をした中年男は、湿地帯みたいな頭をしている。こんなに近くに座って居ると、ちよつと胃がもたれる。

「あ、すいません。ロツクでいいですよね？」

あたしは笑顔で軽く背広の肩を触る。グラスに氷を入れて、粗相の無いように麦焼酎の蓋を開ける。腕時計の時間を見て、心がはずむ。あと十分。

マドラーの動きがゆっくりになる。綺麗なロングドレス。薄暗いオレンジ色の照明。アイスにミネに煙草の煙。これで四時間一万二千円。封筒を手にする瞬間、少し優越感に浸れる。要領の良い人のバイトだ。

* マサコ *

「まあちゃん」

玄関を開けると、妹が笑っていた。同時に暗闇から冷気が忍びこんでくる。

「みいちゃん、おかえりなさい」

「ただいま。寝てた？ごめん。今日鍵忘れた」

妹は億劫そうにブーツを脱いで、放りなげる。

「遅かったね。もう、一時半だよ」

「うん。もう寝る」

スタスタと階段を登っていく。なんと自由な妹よ。今日はどんな素敵な出来事があったのだろう。

しつかりと鍵をかけて、私はきびすを返したが、もう一度振り返って確認した。

そんな事を何度か繰り返した後、ようやく洗面所へ向かう。

* ミツコ *

もらった物を大切にするよりも、《瓜の木に茄子はならない》だなんて親戚や近所の人に言わせないようにするのが親孝行だとあたしは思う。姉とあたしは根本的に考え方が違うのだ。同じ子宮で育ったのに。

そんなことを考えながら、欲しかったロングカーディガンを持って値段も見ずにレジへ向かう。

「八千五百円になります」

綺麗なグリーン。華奢なボタン。

* マサコ *

私が今までバイトを一度もした事がないのは、ただ面倒臭かったからでは無い。私にとって外の世界をこれ以上増やすのは、割に大変なことなのである。トランプで塔を作るような感じなのだ。やつてもやつてもまたやり直しをしなくてはならない。

大学のトイレは広くて綺麗。私は手のひらに石鹸を沢山出して、泡立てる。石鹸は、自分で持ってきたものだ。

洗面台に教科書は置かない。綺麗なのは見た目だけなのだから。あの日コンビニで買ったクリームパスタも、そうなのだ。

「驚いた。全然似てないんだね」

友人は講義室のドアを開けるなり、興奮した様子で私の方に歩いて来る。

「何が？」

「妹。真沙子ちゃんの」

栗色の巻き毛を世話しなく触るのは、この友人の癖なのだろうか。

「ああ。みいちゃん？どこで見たの？」

「雑誌。なんか若い子が読むようなやつ」

大学生にとって高校生は若い子に分類されるのだと、私は最近知った。

「うーん。みいちゃんは流行に敏感なの」

「違う違う。…まあそれもあるけど、顔全然似てないのね」

まじまじと私の顔を眺める。

「うん。あの子、私の自慢の妹なの」

誇らしい気持ちで、私は微笑んだ。

幼い頃から、人形のように愛らしい私の妹。何より大切な私の宝物なのだ。

* ミツコ *

「おっぱいが大きい」

連呼しているクラスメート達。低能だとは思わないけど、あたしは彼らの未来を知っているから少し哀れになる。

会社の上司に世辞を言ったり、時には道化にもなりながら薄い酒を飲む。目当ての女の子も口説けない。そうゆう可哀想な部類の大人。あたしはお店に来るお客達を見て、せつなく思わない日が無い。

「美都子ちゃん」

どうしたことが。

今朝見た夢のせいなのだろうか。今日は一日ひどい気分だ。

「何？」

死んだ犬が出て来た。あたしは何か、あの犬に悪い事でもしたのだろうか。

「これ昨日買ったDVD。観たい？」

彼はまっさらなそれを見せびらかす。

どうしてあんな気持ちの悪い夢を見たのだろうか。恐ろしい。

「そりゃ観たいよ。ジョニーデップでしょ？貸してくれる？」

マリーの目玉が透き通って球状だった。少し血走って。

それで、顔がパンパンにむくんでいて、どす黒かった。

「うーん。貸してもいいんだけど、せつかくだし一緒に見ようよ」

彼はおもむろに学ランのポケットに手をつ突っ込んで、小さいガムを私に差し出す。

「それでもいいよ。勿論そっちの家で、でしょ？」

マリーの飛び出た目玉があたしの方を向いていた。黒い人がやって来て『これはもう仕方ない』と言った。マリーの心臓が、その人にズタズタにされた。

「うん。勿論。じゃ、六限目終わったらまた来るわ」

彼は綺麗なスタイルをちゃんと見せる歩き方で教室を出て行った。

手のひらの小さなガムはけっさいな色をしている。

「ねえ。ちよっと。その人」

あたしが呼ぶと、黒板を消していた男子は少し驚いた顔でやってくる。

「これ、あげる」

少し汗ばんだ手のひらに、それを乗せてやる。

「あ。ありがとう」

男子は照れたように笑ってそれを口に入れ、また黒板の方へ戻っていく。まるでマリーみたいだ。

* マサコ *

「本当にごめん」

言いながら、私は少し泣きそうだった。でも仕方なかったのだ。

「まあ、いいけど。気付いたのが早かったし。でもどうして抜いちやったの？」

母が怪訝そうに私を見つめる。

「ごめん」

「ちよつと疲れ気味なんじゃない？大学忙しいの？」

みんなはどうして思わないの？

危ないじゃない。

恐くないの？

私には火事で燃え盛る我が家が見えるよ？

* ミツコ *

「ちよつと、美都子ちゃん？」

ハッとして目を覚ます。

「え？」

「相当うなされてたけど」

心配そうにあたしを見下ろしている。

彼の上半身の薄い筋肉が綺麗だ。学ランの下も、やっぱり綺麗だったのか。

「あ、今何時？」

「ん？八時だけど」

あたしは慌てて起き上がる。

「ねえ。服をかして？」

あたしは下着を身につけながら立ち上がる。

「え？なんで？制服着りやいいじゃん」
「いいからかしてよ。なんか小さめのやつあるでしょ。今日バイトなの。事務所に制服なんか着ていけるわけないでしょ」
彼はポカンとした顔であたしを見ていた。

* マサコ *

「なんか顔色悪くない？」

友人が私の顔を覗きこむ。瞬間的にすつと身を引いたら、友人は少し驚いた後に不快な表情をする。

「あ、ごめんね。びっくりしちゃったのよ。今日は講義出るの？」

私はあなたに病気を移さないようにしているのよ。分かって。

「うん。今日暇だしさ。それよか、聞いて。当たっちゃった。グアム流行。ヤバイよね。あたしってほんとにツいてる」

彼女は栗色の巻き毛を、これでもかと言うぐらいに触っている。

「へえ。すごいじゃない。私なんて今までの人生、何かが当たったことなんて一度もないのに」

でしょー、と笑って彼女は手のひらを広げる。

「この手。なんか宿ってんのかも。幸運の神様？」

そう言って彼女は私の手を取る。血の気がサツと引くのが分かった。

「真沙子ちゃんにも幸運分けてあげ…」

バシッ。

嫌な音が響く。

やってしまった。

彼女があんぐりと口を開け、立ち上がった私を見上げている。私は鞆から急いで石鹼を取り出し、走り出す。早く、早く、早く。

背後で何か言う彼女の声が、もう聞こえない。誰か助けて。

トイレに駆け込み、急いで水を出す。

石鹼の泡がどんどん、どんどん大きくなる。

もう、大丈夫だから。落ち着いて。落ち着いて。

雑菌だらけの手のひらをゴシゴシと擦る。この汚れを早く落とさなくては。

ああ。彼女の手には雑菌が沢山移ってしまったに違いない。

ああ。とんでもないことをしてしまった。

* ミツコ *

「美都子。ちょっといい？」

玄関のドアを開けるなり、母の様子にただならぬものを感じた。最初頭に浮かんだのはバイトの事だった。

「何？あたしだって友達付き合いってものがあるんだからさあ、多少の夜遊びは……」

「いいから。ちょっと来て」

ああ。面倒なことになった。どこから足がついたのだろう。

台所の椅子に座るなり、母が出したのは姉の名だった。拍子抜けする。

「なあに。まあちゃんがどうかしたの？」

心の中で安堵のため息をつく。

「昨日、冷蔵庫のコンセントを抜いたの」

母の顔色がひどく悪い。

「何？冷蔵庫？」

「そう」

「なんでまた？」

「それが、分からないのよ」

馬鹿らしい。

「間違えたんでしょう」

母は立ち上がろうとするあたしの手を掴んだ。その強い力に、少し物怖じする。

「真沙子ちゃんね。今日、ずっと外で玄関の前につっ立ってたのよ。私が帰ってくるまで」

母のこの表情は、どうしてあたしを不安にさせるのだろう。あたしは眉根を寄せて、心臓の高鳴りを感じる。

「それで？何？」

「あの子、ドアノブが触れなかったみたいなの」

母の目があたしを真っ直ぐに見つめる。

「え？なんで？いつもは触ってるじゃない」

「分からないの。それで、あなた知ってる？昔から少し潔癖なところがあったけど…最近あの子、洗面所で肘の上まで洗ってるのよ」
頭の中がキーンと鳴っていた。それが、静けさのせいなのか何なのか分からなかった。

頭の中で、姉の可愛がっていたマリーが笑った。

* マサコ *

入浴に四時間半、気付いたらかかっていた。髪を丁寧に乾かす。湿気は雑菌を繁殖させるのだ。明日、学校へ行つてあの友人が病気になるっていたら、どうしたらいいのだろう。

怖い。

私は髪がしっかり乾いたのを確認し、ドライヤーのコンセントを抜く。そして、手を洗う。赤切れがひどい。痛む。仕方ない。電気を切って洗面所を出る。ドアを閉めた後、また開けて電気を付ける。コンセントが水に感電していないか。

* ミツコ *

まるであたしが病人になったみたいだった。精神科なんて。「土曜日も確か学校だったよね？まあちゃんって、今日学校休んだのかな？」

あたしと母は病院の前のバス停に座り、いつ来るか分からないバスを待つ。

「…連れてこなきゃね」

あたしの問いを無視して母がひとりごちる。

「…うん」

姉だけじゃなく、こちらまで病んでいく気がした。

『このままだと、1日の9割を手洗いに費やすことになります』ひどく感じの良い精神科医が言った。

『脳内の物質のバランスが崩れているのですよ。決して本人のせいでも、誰のせいでもありません。いいお薬があります。脳のバランスを直してくれるんです』

そんな事はどうでもいいんですよ。姉は病気なんですか？

『強迫性障害という言葉を知っていますか？』

* マサコ *

どうして妹はこんな顔をしているのだろう。

ああ、そうだね。何も触れなくなったこんな私が、みつともない私が姉だなんてあなたは可哀想だね。

「…まあちゃん」

せっぱつまった顔で、妹が言う。

「あたしの手を触って」

私はぐったりしていた。

「みいちゃん。あのね…」

「触れないの？まあちゃん。あたしの手」

妹は明らかに怒っていた。目がひどく鋭く、整った眉をひきつらせている。

「さあ。触つてよ」

妹の白い手が、私に伸びてくる。

私は一瞬我を見失った。

直後、妹の表情が悲しみに変わる。私は大声で叫んでしまったようだった。

「みいちゃん、違うの。これは…」

これは、あなたのためなのよ。

「まあちゃん。病院へ行こう」

耳を疑った。

頭がぼーっとする。

妹のその言葉は、まるで誰か別の人のものようだった。

「あたしも、付いていくから」

病院。病院。

私は病気じゃないよ。みいちゃん。

「泣かなくていいんだよ。治るんだから。大丈夫。脳内の物質がね。なんか、セロトニンっていう…」

「みいちゃん…」

瞳から溢れる涙が冷たい。

「ん？」

「手を洗いすぎて、私の手のひらからは幸運が逃げていったのかなあ？」

ぼやけた視界の中で、妹が部屋を出ていくのが分かった。

* ミツコ *

「美都子ちゃん」

あたしは彼の上に居る。

「何？」

「下行つて。次俺上」

あたしは従順に従う。

「どうして欲しい？」

彼は息も絶えだえに問うので、あたしも息苦しく目をつむる。

「もう少し、右」

疲れきつた彼が、目を細くしてあたしをじつと見ている。

「良かった？」

こういう時に、悪かったと言う人が居たら見てみたいものだ。

「勿論。…ねえ、あたしもひとつ聞いていい？」

「うん。何？」

あたしは彼の手をつかんで自分の下腹部にもっていく。彼はびっくりしている。

「もしかして、イかなかった？」

「違うよ」

彼の手をそのままあたしの目の前にもってくる。

濡れた人差し指が光る。

「あたしのこんなところ触って、汚いと思わないの？」

「…え？なんで？」

「なんとなく」

彼はあたしの髪をなでる。

「思わないよ。好きな人だし」

あたしは彼の下腹部に手を伸ばす。

「あたしも汚いなんて思わない。でも、あんたのことは別に好きじゃないよ」

* ミツコ *

姉が通院し始めて少しした頃、保健師の人がうちに来た。

姉はその人に何かいろいろと質問されていた。その人はあたしのところにも来た。

「おねいさんの、今の状態についてどう思う？」

小太りの、普通のおばさんだった。

「病気だと思います」

あたしは答えた。

「このあいだは、手のひらに血がついていると言いました。赤切れはあるけど、血なんてどこにもついてませんでした」

保健師は、うんうん言いながら聞いている。

「姉は子供なんです。いつまで経っても。あなたには分からないかもしれないけど、まあちゃんは大人になれない人なんです。だからあんな風になったんです」

いつの間にか息が荒々しくなる。

「みんな、嫌なことがあっても乗り越えて生きてるんです。高校生のあたしだって、そんなことぐらい分かります。なのに、まあちゃんには分からないんです」

頭に血が上るのを感じた。
感情的になりすぎている。

「ねえ。美都子さん。私は一人っ子だから、ずっとお姉ちゃんが欲しいって思ってた。今でも思いますよ」

保健師が微笑んでいる。

「あなたのおねいさんは、とても優しい人ですね。あなたのことが、本当に好きなんですよ」

「まあちゃん」

姉は横になつて天井を見上げていた。

「みいちゃん」

あたしは姉より少し離れたところに座る。

「みいちゃん。ごめんなさい」

姉は泣いている。近頃、いつも泣いているのだ。

泣きたいのはこっちだ。

「謝る必要なんかないよ」

あたしはテーブルの上にある小さな紙切れを手にとる。

ロトシックス。

早く捨てればいいのに。

「私ね、みいちゃんが病気になったらどうしようと思って、怖いのが、姉がしゃくりあげながら言った。

「まあちゃん。まあちゃんは菌なんか持っていないよ。それに、みんなそんな簡単に病気になんかならないよ」

姉はもう何にも触れなくなっていた。壁にも洋服にもスプーンにも箸にもティッシュにも。本にもテレビのリモコンにも。手に軟膏を塗るのでさえ、他の誰かにはやらせなかった。キャップの蓋だつて、あたしが開けてやらなきゃいけない。無論、そんな姉が学校になど行ける訳がない。

「そんなこと、分からないじゃないの」

姉はぐじぐじと泣いている。

あたしはどうしようもなく、やるせない。

「まあちゃん。あたし、バイトに行くよ」

姉はいつまでもいつまでも泣いているのだった。

* ミツコ *

湿地帯にも雪が降るのだ。

中年男の頭を見て、あたしは思う。男は酔いに任せて、あたしのいろいろなところを触ってくる。

この男をこの店で何度か見たが、誰かと一緒だったことがない。

よっぱどのお偉いさんなのか、ただの寂しい人間なのか。

「アフター行こうよ」

男の息がひどく臭う。

「あたしは、ここのホステスじゃないので、アフターも同伴も出来ないんです。残念ですけど」

男はあからさまにふてくされる。

「コンパニオンだろ？見たら分かるよ。それを承知で言ってるの。君、このあいだも居たよね？いくつなの？」

「二十歳です」

グラスに酒を作り、あたしは一気にそれを飲み干す。

「二十歳？嘘だあ。見えないよ。十六ぐらいだろう」

男もロツクの麦焼酎を一気に飲む。ミラー話法。

「十六歳とセックスしたら犯罪ですよ？」

あたしは再び酒を作る。ボトルがみるみる少なくなる。

「十万あげるよ」

思わずマドラーを持つ手が止まる。

「冗談言わないでください」

男は笑った。

「僕、冗談は嫌いなんだ」

男は終わった後、あたしの胸に顔を埋めた。湿地帯が皮膚にべたつく。

質素なピンクの部屋。いかがわしい玩具が透明のケースの中で、買手をまっている。

「ねえ。もう十万あげるから。あと一回だけ」

あたしは顔を青くする。

「なんでそんなにお金持つてるの？お店でも結構払ったでしょう」
背中が寒い。

「…嘘でしょ」

男は何も言わずに頬を擦り寄せてくる。脂ぎったみにくい顔。それと同じで、脂ぎったしつこいセックス。

「ちよつと。財布見せてよ」

頭が痛い。最低だ。

「馬鹿な女だなあ」

男はさも愉快だというように笑っていた。

「信じられない」

あたしは疲れきった身体を起こして男を押し退けた。

「近頃の子供は、馬鹿なんだなあ」

あたしは膝を抱えた。頭が混乱している。

「もう少し、世の中を疑わないと」

目の前が真っ暗だ。

「あのねえ、相手が僕で良かったよ？怖い病気を持ってる人だって世の中には沢山いるんだから。オーラルでも移るんだよ？覚えておきなさい」

悔しさがあたしの心をわし掴みする。

なんなんだ、一体。

馬鹿な。

思考回路が徐々に停止していく。

あたしは大人なんだ。子供扱いするな。

指先に血が通っている気がしない。

顔が熱い。どうしよう。どうしたらいいの。

恐いよ。

真っ暗闇の中で浮かんで来たのは、姉の涙だった。

「…まあちゃん」

《みいちゃんが病気になったらどうしようかと思って》

昔からどんなにあたしが冷たくしても、いつもくっついてきた。ああ、そうだ。

元気だったあの頃の姉はもう居ないのだ。

「…あたしの姉は優しい人です」

「はあ？」

「あたしがこんなことをしたと知っても、多分責めたりしません」

「どうしたの急に」

「あたしを汚いものだと思ったりもしません」

壁に描かれたイルカが、光っている。

「姉は繊細で傷付きやすいんです。でも姉が泣くのは、いつも誰かの為なんです」

男は呆れたように起き上がって、ワイシャツを着始めた。

「姉は要領が悪いんです。だって人生のうちの貴重な一日を、全て手を洗うのに使ってるんです。だけど姉は、誰よりも綺麗な大人なんです」

誰に向かつてしゃべっているのか、もう分からなかった。

「あたしは、あんたみたいな汚い大人ともセックスできます。金さえくれれば、後はあんたがどうなるうと知った事じゃないと思います。むしろ死ねばいいと思います」

あたしの声はそこから詰まって、目の前がピンク色ににじんだ。

「…だけど、あたしの姉は。あんたにも触れないんだと思います」

* マサコ *

目を覚ますと、まだ朝の五時だった。乾燥した指先がじんじんする。あちこちに赤い線が入っているのだ。仕方ない。ふと僅かに香水の匂いを感じて床を見たら、そこで妹が眠っていた。真っ白で陶器の人形のようなうだ。

「…みいちゃん？」

私はつぶやいた。

目が腫れぼったく、開きにくい。

まだ外は薄暗いのに、鳥の鳴く声が聞こえる。

二度寝したあと目を覚ますと、妹はもう居なかった。代わりに机の上に紙袋が置いてある。小洒落た紙袋だ。私はゆっくり近付いた。

紙袋には小さなメモが貼ってある。

「…みいちゃんの字だ」

なんだろう？不思議に思って、読む。

『まあちゃんに、小さなラッキーをあげます。バイト代をはたいて買ったよ。高かったんだから、絶対に履いてよね？学校かなり遅刻です。六限目だけでも出てくるね。いつてきます。美都子より』

* ミツコ *

玄関を開けた瞬間、あたしの視界に母の満遍の笑みが飛びこんでくる。

「何？何？なんかあったの？」

つられてあたしまで笑ってしまう。

「みいちゃん」

はっとした。

母の後ろに、スキニーパンツを履いた姉が立っていたのだ。

（後書き）

この話の真沙子の例は、強迫性障害のほんの一例です。

強迫性障害には様々な種類があり、個人の精神状態も多種多様です。なので、この文章を読んで、『強迫性障害とはこういうものだ』という考えを持つのはやめて下さい。

強迫性障害を持ったいていの人は『こんなことをしている自分はおかしい』と認識しています。また、強迫性障害は、統合失調症（精神分裂病）や操うつ病とは異なります。私はこの小説で、様々な事についてうまく伝えられたかどうかが心配です。誤解が生じることのないよう、何か疑問や質問などあれば教えてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0860b/>

姉妹

2011年1月16日01時08分発行